ソグド語の Nāfnāmak「国名表」の 2・3 の読みについて

Some new readings of the *Nāfnāmak* in Sogdian

吉 田 豊^{*}
YOSHIDA Yutaka

Nāfnāmak とは、ソグド語で書かれた国名（或は民族名）表のことである。かつて W. B. Henning は、ドイツ・トルファン探検隊が将来した資料中に 1 点を発見し発表した（*Sogdica*, London, 1940, pp. 8-11）。類似の文書の極小断片は、龍谷大学図書館が保管する、大谷探検隊将来資料中にも見いだされる（吉田豊『オリメント』第28巻第2号1985年、57-58頁参照）。国名は西は東ローマから東は朝鮮まで、ほぼ西から順に配列されているが、すべての名前が比定されているわけではない。

この種のリストはマニ教徒の書記の学習用であったと考えられており、唐代のものともみられる漢文仏典の紙背に書かれている。このことから8世紀以降の文書であることは明らかであるが、文書が書かれた正確な年代を知ることは困難である。トルファンにおけるマニ教の歴史（森安孝夫『ウイグル＝マニ教史の研究』大阪 1991年、127-77頁参照）や、ソグド語の使用の下限を考慮して10世紀頃のものとするのが妥当であろう。

筆者は、1992年10月三菱財団人文科学研究助成金の支給を受けて、旧東ベルリンにあるトルファン研究所が保管する、ドイツ・トルファン探検隊将来のソグド語資料の調査を行った際、Henning が発表した Nāfnāmak の写本の原物も閲覧することができた。それと、Henning が、当時彼の手元にあったあまり質の良くない写真から転写したテキストと比べてみると、2・3読み誤りがあることに気が付いた。その一つは、ソグドの名称に関するもので、ソグド語研究者にとっては少なからず重要な問題を含んでいる。それ故、敢えてこのきわめて短い拙論をおこすことにした次第である。

本来 TiiD 94 の編号で整理されていたこの断片には、現在新たに So 20166 という番号が与えられている。漢文仏典を横の辺にそって半裁し、その裏面に書かれている。大きさは、横32.5 cm、縦14.0 cm である。漢文仏典は『佛説佛名經』（『大正』14巻、138c-139a）に対応することが、その後の調査で判明した。右下と左上の一部が破損している以外は、ほぼ完全な文書である。

(a)コラムの(c): Henning は、*δyk* の前に3文字分破損していると見なしたが、実際

* 神戸市外国語大学助教授

Associate Professor, Kobe City University of Foreign Studies

には空白になっているように見える。それが正しければ *dyk* は完全な語であることになる。似た綴り語としては、*dykh*~*dyxh*「手紙」が知られているが、これをその語と見なすべきかどうか分からない。もしも、*x* と *ɣ* を区別するために、*ɣ* を分かち書きし (cf. N. Sims-Williams *apud* W. Sundermann, *Mitteliranische manichäische Texte kirchengeschichtlichen Inhalts*, Berliner Turfantexte XI, Berlin, 1981, pp. 194-98), その後に比較的長い空白が存在したとすれば、[swɣ]-*dyk*「ソグド(の)」と復元すべきかもしれない。

(b)コラムの(7): Henning は (s)wt'yk と読み、「ソグドの」と訳すが、この読みは不可能で、mw't'yk としか読めない。Henning の形式はその後、「ソグド」を表す語形としてしばしば引用されている (例えば、熊本裕 『IBU 四天王寺国際仏教大学文学部紀要』第17号, 1985年, 6-12 頁参照)。しかしこの形式は、今後「ソグド」を表す語形のリストの中から削除しなければならない。

ではこの mw't'yk は、どこの国名であろうか。筆者は、『唐書』の西域伝康国の條で昭武姓の国一つに数えられている戊地 *məu d'i がそれではないかと考えている。この国は、『西域記』では伐地国と書かれ、『唐書』西域伝火尋国の條では戊地国と表記されている。これらに関して白鳥庫吉は、『魏書』西域伝に「牟知国は牟知城に都す。忸密の西南にあり」とあり、忸密がブハラであると考えられることから、同様にブハラの西あるいは西南にあるとされる戊地等と牟知は同じ地名であると結論した。しかも、牟知と戊地が音的に酷似することから、戊地の表記が正しいとした(『西域史研究』下, 東京1944年, 124頁参照)。mw't'yk は牟知 *mieu̯ tie̯ または戊地とよく似ており、発音面からは問題がない。従来行われている『西域記』や『慈恩伝』の伐地国の原語の比定については、季羨林等 校注『大唐西域記』北京 1985年, 96頁参照。ただしこれらは白鳥の重要な指摘を一切顧慮しておらず、現在では問題にならないであろう。

伐地国の位置は、ブハラを基準にして、『西域記』は西四百里、『慈恩伝』は西百余里とする。また『魏書』によれば、牟知国はブハラの西南九十二里と算出できる。これらから、『西域記』の記事は伝写の誤りではないかと推測され、問題の国はブハラの西ないし西南数十キロメートルのところ可能存在したものと思われる。Nāfnāmak の中では、その前後にタシュケントとチャガーニヤーンが見え、ここにブハラの少し西にある地名が現れることは不思議ではない。なお、アラビア語で書かれた地理書の中で、ブハラの近くの地名としてあげられている Mudhyānkath (cf. W. Barthold, *Turkestan down to the Mongol invasion*, 2nd ed., London, 1958, p. 128) は、これと関係があるかもしれない。

(c)コラムの(9): Henning は *ɣ(wmp'n)y* と読み、クエスチョンマークを付している。

またこれに対応する地名として、期待される可能性をいくつか指摘するが、どれとも一致しないとしている。写本で彼の読みを確認すると、p の痕跡は見え、最も可能性の高い読みは $\gamma w m(yr)ny$ である。この場合 $-ny$ は形容詞を形成する接尾辞と考えられるので、地名を表す部分は $\gamma w myr$ である (cf. I. Gershevitch, *A grammar of Manichean Sogdian*, Oxford, 1961, p. 161)。Henning が期待される可能性として列挙したものの中では、ワッハーンを表す護密 $*\gamma uo\ m\dot{i}\dot{e}t$ が $\gamma w myr$ にびったり対応する。ワッハーンを表す諸々の漢語の形式とその原語については、森安孝夫による解説（桑山正進編『慧超往五天竺国伝研究』京都，1992年 176-77頁）を参照せよ。それによれば、護密（～護蜜，胡蜜）の原語は判然としないという。今後、護密の原語を論じる場合、一つの可能性として *Nāfnāmak* の $\gamma w myr$ が言及されるべきであろう。

(c)コラムの14：Henning は、 $\gamma ry-\dot{s}'\gamma(k)$ と読もうとするが、 γ の後には文字は存在しない。彼が k と読もうとしたのは、文字 x の長い尻尾である。しかしこの新しい読みも、地名の比定にはなんら貢献しないのは残念である。なお、この地名と比較して Henning が $\gamma r\dot{s}'\gamma'y$ の読み誤りではないかと考えたウイグル文献に見られる語を、Zieme は $o\dot{s}aq\dot{i}$ 「以前の」と読んでいる (cf. P. Zieme, *Buddhistische Stabreimdichtungen der Uiguren*, Berliner Turfantexte XIII, Berlin, 1985, p. 183)。